

## ワット・シエントーン (Wat Xiengthong)

訪問先都市	ルアンパバーン
コメント	造形的にラオスで最も評価の高い寺院で、ルアンパバーン様式とも呼ばれている。外から観るだけではなく、寺院の中も巡回することができ、間近で黒い壁画を隙間なく覆い尽くしている細密画を堪能することができた。花木をモチーフとしたデザインが多く、古くからラオスの人々が自然に対して、親しみや畏敬の念を抱いていることを感じた。

## 9月15日

### デク・カムファ民族学校 (Dek Kamfa Ethnic School)

訪問先都市	ルアンパバーン
面会者	Mr. Chanhthone phengphachanh, Director of Dek Kamfa School
コメント	1985年に設立された孤児のための学校である。敷地内には寮が併設され、子供たちが住んでいる。ディレクターからの学校説明後、文化紹介を相互に行った。ラオス側からは、子供たちによる伝統的な踊りと歌の披露があった。日本側からは、「ふるさと」「ベストフレンド」「チャンパーの花」の3曲を歌った後、岡山の踊りである「うらじゃ音頭」を子供たちと共に踊った。その後、折り紙、茶道、書道、けん玉・こま、サッカーの5グループに分かれて、子供たちと交流した。言語は通じなくても、彼らと直に接することで、ラオスの人々の温かな人柄をより実感することができた。

### ラオス国立不発弾処理プロジェクト ビジターズセンター (Lao National Unexploded Ordnance Programme (UXO LAO) Visitors Centre)

訪問先都市	ルアンパバーン
コメント	ラオスでの不発弾の歴史や実物、不発弾処理の道具などを展示しており、不発弾がラオスに及ぼしている影響や被害などを展示や動画を通して見るすることができた。写真だけでなく、実物を見ることができ、貴重な体験ができた。

### タート・クアンシーの滝 (Tat Kuangsi)

訪問先都市	ルアンパバーン
コメント	ルアンパバーン市内から約32kmの所に位置する景勝地。道中では熊の飼育現場を見学した。滝つぼにかかった橋から滝を眺めたり、滝で水遊びをしたりした。スケールの大きさに圧倒され、改めてラオスの自然の雄大さを感じた。

## 9月16日

### 托鉢 (Takbath)

訪問先都市	ルアンパバーン
コメント	托鉢とは僧侶が鉢をもち、食物を乞いながら歩くこと。特にルアンパバーンは寺院が多いので托鉢の規模が大きい。お供えする側は靴を脱いで膝立ちになり、目の前を速やかに歩く僧侶一人一人の鉢にもち米などを入れる。朝5時半という早朝にもかかわらず、地元の人から観光客まで多くの人々が托鉢をしていた。その日だけではなく毎朝行われているということに驚きを感じたのと同時に、ラオスでは日常生活の一部であり習慣であることを知った。

## ルアンパバーン国立博物館 (National Museum in Luang Phabang)

訪問先都市	ルアンパバーン
コメント	王朝時代の歴史を展示した博物館であり、建物はかつての王宮を利用している。王族が使用した家具やキラキラと光るモザイク壁画など、豪華絢爛な品が多数展示されていた。あまり知られていないラオスの歴史や、独特の絵画表現の仕方を知ることができた。また、ルアンパバーンの世界遺産の証明書も見ることができた。

## 独立行政法人日本貿易振興機構による講義 (Lecture by Japan External Trade Organization; JETRO)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	山田健一郎 ビエンチャン分室所員
コメント	JETROはかつて日本製品を海外へ輸出するための機関として存在したが、昨今の変化する経済状況に対応したサービスや海外移転する企業に対して情報提供をするという面も持つようになった。17年もの間ラオスに関わっている山田さんから、昔と今の変化や日本には分からないようなラオスの話を聞くことができた。また、ラオスで何か新しいビジネスをするなら何をするか、という観点からラオスを見ても面白くと言われ、これ以降は新たな視点でも、ラオスを観察することができた。

## ホームステイ・マッチング及びホストファミリーとの夕食 (Homestay matching and Dinner with host family)

訪問先都市	ビエンチャン
コメント	ホストファミリー及び関係者が招待され、会食が行われた。食事をとりながら様々な話をすることで、ホームステイに対する緊張をほぐすことができた。また、自分のホストファミリー以外にも親睦を深めることができた。

## 9月19日

### ラオ・ブリュワリー株式会社 (Lao Brewery Company)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	Mr. Sompadith Phommavihan, director of media department
コメント	Beerlaoという有名なビールを生産している会社がラオ・ブリュワリー株式会社である。1973～1975年はフランスと合同で経営していたが、その後はラオス政府のみ経営に関わっている。年間3億8千万リットルのビールを生産している。生産したビールの99%が国内で消費されており、1人当たり年間100リットル消費している計算になるが、外国人観光客による割合が高い。年々外国人観光客が増加するにつれて消費量も増加している。また、19か国にビールを輸出しているが、営利目的ではなく、ラオスをもっと広く知ってもらう目的である。実際の工場見学では、清涼飲料水のラインを見学させていただいた。缶や砂糖はタイから輸入したものであるが、水はメコン川の水を精製し、使用していた。多くのレストランではこの会社のロゴが入ったグラスや冷蔵庫などを使用しており、ラオスで最も身近に感じる会社の一つである。これらの備品は無料で提供していて、おいしさだけでなく、様々な方法で工夫しながら生産を伸ばしていると感じた。

### 特定非営利活動法人ラオスのこども (Specified Non-profit Corporation, Action with Lao Children)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	政岡史織 ラオス駐在スタッフ
コメント	「ラオスのこども」は1982年から活動を開始したNPOで、ラオスと日本の両方で様々な教育活動を展開している。ビエンチャン事務所には日本人スタッフは一人で、残りはみんなラオス人であったが、皆大変生き生きと仕事をしている様子だった。たくさんの本が展示してあり、中には「はだしのゲン」など日本の本を翻訳したものもあった。団体の概要について説明を受けた後、ダンスや歌を披露し、紙風船や折り紙などで子供たちと遊んだ。子供たちは遊びだすとエネルギーで、紙風船は特に盛り上がった。

### パトゥーサイ (Patuxay)

訪問先都市	ビエンチャン
コメント	パトゥーサイとはビエンチャンにある凱旋門のことで、内戦の終結とパテート・ラオ（1950年代から1970年代にかけての共産主義革命勢力）の勝利を記念して1962年に建造が開始された。工事はまだ貫徹されておらず、現在でも未完成のままである。ビエンチャン市内を一望できる上部まで登り、美しい街並みを観た。

## 9月20日

### 在ラオス日本国大使館 (Embassy of Japan in Lao P.D.R.)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	川田一徳 公使参事官 大西英之 参事官 中野美智子 一等書記官
コメント	川田一徳公使参事官の挨拶後、大西英之参事官からラオスについて講義を受けた。講義の前に、団員全員がラオスについての印象を述べた。各団員がラオスの印象について話すのはルアンパバーン以来で、ホームステイ後ということもあり、新たな視点も加わっていた。講義は各団員が語ったラオスの印象をプレゼンの要素に加えながら進めてくださり、団員が抽象的に感じていたことを的確に言語化してくださったので、全団員が話に引き込まれていた。各団員が考えを深め、ラオスという国の奥深さを認識した。

### 独立行政法人国際協力機構 (Japan International Cooperation Agency : JICA)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	作道俊介 Senior Representative
コメント	JICAの青年海外協力隊が1965年に初めて行われた際の派遣国の一つがラオスであり、日本とラオスの関係は深い。JICAは「経済・社会インフラ整備」、「農業の発展と森林の保全」、「教育環境の整備と育成」及び「保健医療サービスの改善」の4分野を重点的に援助を実施しているが、事務所で受けた講義から具体的にどのような支援が行われているかを知った。実際に訪問したナムダムダムや、町で目にした日本製のバスがJICAによって支援されていたことなどを聞き、JICAの支援が広く行われていることを実感した。

### マホーソット病院 (Mahosod Hospital)

訪問先都市	ビエンチャン
面会者	Mr. Somchay Lorvongseng, Deputy Chief of Administration Department Dr. Amphay Phayaluanglath, Chief of Clinical Laboratory Department
コメント	病院での講義では、マホーソット病院についてやラオスの医療の現状を知ることができた。JICAの「母子保健人材開発プロジェクト」が大きな役割を果たすなど、マホーソット病院はラオス医療界の中心となっている。医者を始めシニアボランティアの方からの話から、ラオスの医療をより向上させていこうとする熱意を感じた。